

シテライフ創刊30年記念企画

シテライフは30年を迎えました

30 anniversary Life Archives

北摂の歴史記録

現在、そして未来にもつながる過去の情報を取材、編集し、記録する特集です。北摂の歴史から、私たちの住むまちの魅力を学び知る機会になればと思います。第24回は「池田で見つかった日本画10枚」について紹介します。

シテライフ アーカイブズ 検索

## 第24回 池田で見つかった日本画10枚

— 小さな茶店から見える 江戸／明治の歴史と文化 —

池田市の民家の物置から、古い日本画10枚が見つかった。その一家は、200年以上前から明治半ばまで池田市の呉服橋のたもとで茶店を営んでいた。日本画は茶店の繁盛ぶりを伝える現代のポスターのようなもので、描かれた客たちの髪型の変化などから江戸後期から明治前期にかけての時代の変遷や当時の文化がうかがえる。

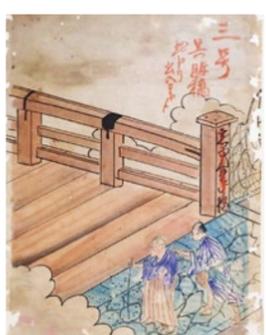
**歴史案内**  
 関西大学文学部三回生の二宮愛さんと大和大学政治経済学部二回生の大倉聖樹さんが日本画の寄贈者や寄贈先の歴史民俗資料館らを取材しました。



茶店でつろぐ客と、店の前を歩く猪名川関ら



橋の欄干にもたれてつろぐ人たち



「巡礼橋」から「呉服橋」に改称(朱書き)

### 日本画の広告ポスター

見つかったのは関大職員、荒堀善文さんの池田市内にある実家。絵はいずれもカラーで、

出入りする人たちの様子が描かれていた。当時の有名な相撲取り猪名川関も再三登場し、客寄せの広告ポスターとして店内に飾られていたとみられる。

### 呉服橋界隈の歴史

呉服橋は明治11年までは「巡礼橋」と言われていた。天正7年(1579年)伊丹城城主荒木村重の従弟村正が、池田城を織田信長に攻められ伊丹城へ逃げる際、池田城とともに巡礼橋は焼き落され「巡礼橋」と改められた。

た。その以降架橋はされず、渡し舟であった。しかし文化12年(1845年)に荒木茂兵衛が発起人となり新しい「巡礼橋」が架けられた。その後、明治11年(1878年)に「呉服橋」と改められた。



橋のたもとに人力車も登場



帽子姿の男性や水売りが店前を行き交う



店の前では洋装の警官らしき男性も



店の前には兵隊のような洋装の男性が登場する



ここでも猪名川関が登場する



甘酒でご機嫌の客たち



にぎわう店内と行きかう商人ら

### 描かれた時代の変化

橋のたもととは、現在の国道176号が昭和の初めに開通するまで、能勢方面に向かう旧街道と川西や伊丹方面に向かう道路が交差し、人の往来で様々な商店や芝居小屋「呉服座」が繁盛した。劇場は明治の初頭、現在の阪急池田駅の近くに建てられたが明治25年(1892年)に呉服橋の下流100mほどの地点に移された。仕事の合間に芸人がぶらぶら歩いて2、3分の茶店「渋や」を頻りに訪れた。

この芝居小屋が興味深いのは、公民館のような機能も兼ね備えていた点だ。選挙演説も行われ、荒畑寒村や幸徳秋水らが熱弁をふるったと伝えられる。昭和46年(1971年)に愛知県の明治村に移設され、その後、国の重要文化財に指定された。

### 力士猪名川

4種類の絵は時代背景が違うのに、共通しているのは、猪名川という。猪名川は歌舞伎、浄瑠璃「関取千両幟」の主役として登場する。「関取千両幟」は猪名川と千田川とをモデルにした作品で、現在では二段目「稲川内」が上演されている。

### 現在の呉服橋

茶店「渋や」があった場所には今は何の痕跡もなく、店があったであろう場所の目の前には国道176号が通っている。呉服橋を取り囲む環境も江戸時代から大きく変化した。「巡礼橋」の名が現在の「呉服橋」へ。そして猪名川の上を巨大な阪神高速道路がまたいで併走する。「渋や」と同じく軒を連ねていた商店も、今はない。



現在の呉服橋前が刻まれた石板



現在の呉服橋



日本画と同じ方向から撮影した「渋や」跡地

### 取材を終えて

歴史の表面には決して登場しない1世紀以上前の小さな茶店。それでも人々はそこで仕事の合間に一服し、橋の欄干にもたれて川風になぶられ、甘酒を飲んでご機嫌になり、その間を相撲取りが闊歩した。そんな当時の様子を、10枚の日本画が生き生きと映し出している。古色蒼然たる日本画も貴重なメディアなのだ、初めて気づいた。

関西大学文学部三回生 二宮愛・大和大学政治経済学部二回生 大倉聖樹